

日西交流史は十六世紀中葉、なかでもフランシスコ・ザビエルの来日とキリスト教の伝来とともに開始され、まずは鎖国まで続く。この時代は世に南蛮時代として知られ、主として宗教と商業の面において交流が行われた。開国後の幕末・明治を迎えると、両国の交流は単に宗教や商業にとどまらず、文学、言語、音楽、美術など幅広い分野で徐々に活発になってゆく。その一つがスペイン語である。

日本では、明治以来、英独仏語中心の時代が長く続いた。戦後、一九七〇（昭和四十五）年代になってようやく第一次スペイン語ブームを迎え、こえて一九九二（平成四）年には第二次スペイン語ブームが到来し、スペイン語教育はかつてない盛況を呈している。スペイン語の教科書や参考書が溢れ、充実した辞書も多数発行されている。

スペイン語がようやく獲得した今日の人気の背景には、明治にはじまるスペイン語教育者の想像を絶する苦勞があったことは、今更言うまでもないであろう。今、スペイン語教育者はスペイン語の将来を見つめながら、いやそれを見つめるためにも、一〇〇年を超すスペイン語教

育史の足跡を辿っておくことはどうしても必要である。

スペイン語が高い人気を誇る時代に、本書『新西班牙語事始め』が上梓されることは大きな意義を持っている。著者の浅香氏は知る人ぞ知る博覧強記の人である。氏が苦勞を重ねて収集された一級の資料を駆使してここに再現された日本におけるスペイン語教育史は、前人未踏の傑作であろうと言えよう。

(ばんどう・しょうじ 京都外国語大学名誉教授)

新西班牙語事始め  
目次

巻頭言 坂東省次 003

はじめに 008

### 第一部 総論

第一章 日本人とスペイン語の出会い 014

第二章 スペイン語辞典発達小史 032

### 第二部 出会いから江戸末期まで

第一章 日本に渡来した最初のスペイン人・デイエス 062

第二章 亜墨利加でイスパニヤ語を学んだ日本人・初太郎 076

### 第三部 明治期

第一章 外務省第一回スペイン留学生・三浦荒次郎 098

第二章 日本におけるスペイン語教育の創始者・ビンダ 112

第三章 日本人による最初のスペイン語会話書・片桐安吉 137

第四章 メキシコ移民が著したスペイン語会話書・黛忠太郎 148

#### 第四部 大正期

第一章 『四國對照南米語自在』・海外雄飛会 160

第二章 スペイン語通信教育講座事始・酒井市郎 174

第三章 『和西新辞典』編纂者・金沢一郎 200

第四章 海外植民学校スペイン語教師・リカルテ 206

第五章 メキシコ移民の『西日辞典』・照井亮次郎 218

#### 第五部 昭和期

第一章 孤高のスペイン語辞書編纂者・村岡玄 234

第二章 昭和戦前のスペイン語学習書 256

第三章 放送によるスペイン語講座の誕生・笠井鎮夫 269

参考書目 279

## はじめに

本書は、日本人とスペイン人がどのように出会い、そしてどのようにスペイン語と接触し交わっていったかということのをべたものです。スペイン人と会って最初にスペイン語を聞いた人、スペインの土を最初に踏んだ人、漂流してスペイン領アメリカで暮らした人という話題を取り上げました。一方、明治時代に外国語学校が創設されて、スペイン語の学習が始まり、日本におけるスペイン語教育が初めて本格的な出発を迎えた草創期にどのようにスペイン語を教え、あるいは学んだのか、また刊行された辞書や学習書について記したものです。

日本人とスペイン語の出会い、ことばを変えて言うこと、現在のスペイン語学習の出発点は、明治三十年（一八九七）九月高等商業学校附属外国語学校の開校にあるといってもよい。このスペイン語黎明期とも言える時代に、どんな目的で何のためにスペイン語を学んだのか、少なくとも垣間見ることができると思います。日本におけるスペイン語事始から一〇〇年以上経った今日、スペイン語学習は着実な歩みを示したと言えます。

筆者は、昭和五十年（一九七五）秋、初めてスペインの地を踏み、二年間の留学中さまざまな体験をしました。マドリード国立語学学校日本語学科のラミール・プラナス先生の知己を得て、日本におけるスペイン語事始にも大いに関心をもち、雑誌等に執筆した論考をここに一冊

の本として纏めることができました。

資料を集めるために、東京都千代田区神田の古書店街で本を漁ったり、東京古書会館で毎週末に開催される古書展に馳せ参じたり、高円寺の西部古書会館にも足を運びました。昭和五十年代から昭和六十年代までは足で一つ一つ探しましたが、現在ではインターネット検索で易々と見つけることもできるし、国立国会図書館のデジタルライブラリーも便利に使えるようになりましたが、漁書の楽しみと喜びは古本屋巡りにつきまします。そして、古書収集の術は、わが師徳永康元先生の薫陶を受けたおかげです。

英語事始めやフランス語事始めという書はすでに刊行されていますが、「西班牙語事始め」は、本書が初めてであろうかと思えます。「西班牙」は「イスパニヤ」または「スペイン」とも読めますが、本書は趣きをだして、「イスパニヤ語事始め」としたいと思えます。江戸時代に刊行された牧山耕平訳『萬國史』には「西班牙」と見えます。また明治六年には「伊班亜」という記述があります。

各章の初出は次のとおりです。本書をなすために、修正・追記を施しました。第一部は総論、第二部から第五部の各章は、スペイン語事始に関わった人物を取り上げて、発行された書物をめぐるテーマについて論じたものです。

- 「日本人とスペイン語の出会い」『スペイン語の世界』世界思想社、一九九九
- 「西和辞書発達小史」『PINTUS』二十七号、雄松堂書店、一九八九
- 「ペロ・デイエスの日本見聞記について」『イスパニア図書』二号、一九九九
- 「亜墨利加でイスパニヤ語を学んだ日本人」『イスパニア図書』六号、二〇〇三
- 「外務省第一回スペイン留学生」『スペイン学』十六号、二〇一四
- 「日本におけるスペイン語教育の創始者」『イスパニア図書』三号、二〇〇〇
- 「日本人最初のスペイン語会話書」『イスパニア図書』十号、二〇〇七
- 「明治期メキシコ移民が著した会話書」『イスパニア図書』八号、二〇〇六
- 「四國対象南米語自在」を巡って」『スペイン学』十八号、二〇一六
- 「スペイン語通信教育事始」『イスパニア図書』四号、二〇〇一
- 「金沢一郎と『和西辞典』」『月刊言語』一九八六年十二月号、大修館書店
- 「スペイン語教師アルテミオ・リカルテと横浜」『スペイン語学』十三号、二〇一一
- 「大正期メキシコ移民の『西和辞典』」『イスパニア図書』九号、二〇〇六
- 「孤高のスペイン語辞書編纂者」『イスパニア図書』七号、二〇〇四
- 「昭和戦前のスペイン語学習書」書下ろし
- 「放送によるスペイン語講座の誕生」『イスパニア図書』五号、二〇〇二

先に同学社より『スペイン語事始』を著してから、新たに論考二篇を認め、書下ろしを一篇加えて、ここに『新西班牙語事始め』として本書の出版に至りました。今回の出版に当たり論創社編集部松永裕衣子さんにお世話になりました。出版に携わった皆様にお礼申し上げます。

本文中の資料は、所蔵を明記したもの以外は筆者蔵である。また、引用した資料・日本語およびスペイン語の文に誤りと思われる箇所があるが、あえて訂正を施さない。

平成二十九年春

東京谷在家にて 著者記す

第一部  
総論

## 第一章 日本人とスペイン語の出会い

### 一 日本人とスペイン人との出会い

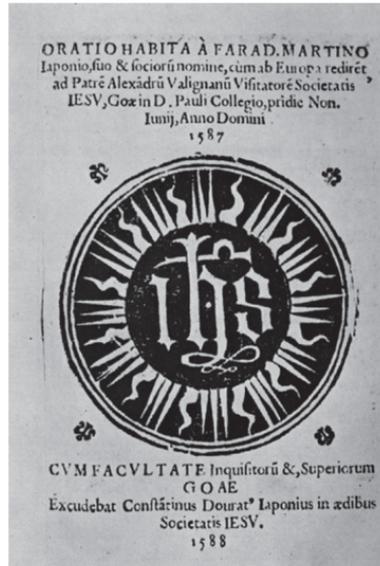
日本人が初めて出会ったヨーロッパ人は、南蛮人と呼ばれたポルトガル人そしてスペイン人であった。その出会いは、一五四三年九月二十三日（天文十二年八月二十五日）ポルトガル船の種子島来航により鉄砲を伝えたポルトガル人であった。翌年、一五四四年鹿児島に来航したポルトガル船のペロ・デイエス（スペインガリシア出身）、さらに、一五四九年八月十五日（天文十八年七月二十二日）フランシスコ・シヤビエル〔ザビエルに同じ〕（スペインナバラ出身）がスペイン人司祭トレスと修道士フェルナンデスを伴い鹿児島出身の日本人ヤジロウ（弥次郎）を従えて、布教のため鹿児島に上陸し、鹿児島、山口、京都、平戸などを訪れ布教に従事したのが、日本人とスペイン人の最初の出会いである。

このヤジロウという人物は、武士であったが人を殺め追い詰められて、やむを得ず港に停泊していたポルトガル船に乗り込んで誘われるままマラッカに赴き、そこでシヤビエルに巡り合

うことになった。その間にポルトガル語やスペイン語も片言程度でできるようになったのだろう。シャビエル以後四〇年間、カトリックの布教は西日本に信者を増やし、一五八七年（天正十五年）豊臣秀吉が「バテレン追放令」を出した年には信者の数は二〇万人に達していた。シャビエルは二年半滞在してから日本を離れ、その後の布教活動はイエズス会のポルトガル人宣教師がすすめた。

スペインとの関係は、徳川家康の時代になり新しい展開の兆しを見せ、フランシスコ会士へロニモ・デ・ヘスースに対してスペイン船の日本寄港を許可し、一六〇八年（慶長十三年）浦賀に初めてスペイン船が入港している。しかし、一六二四年（寛永元年）に徳川幕府はスペイン船の来航を禁止し、一六三九年（寛永十六年）にはポルトガルに対して断交を通告したので、近世初期の日本とスペインおよびポルトガルとの関係は途絶えた。

シャビエル以来七五年間（一五四九～一六二四）の日本とスペインの関係において、日本人がスペインを訪れたこともあった。シャビエルと共に日本を去った鹿児島ノベルナルドは、一五五三年にイエズス会の学院で勉強するためにポルトガルに赴いている。彼はポルトガルからスペインのサラマンカそしてバルセローナを通りローマを訪れ、再びコインブラに帰着したが、そこで一五五七年に亡くなった。墓誌がコインブラ市内にある。日本人最初の渡欧留学生でした。さらに九州の三侯がローマに派遣した天正少年使節は、一五八二年（天正十年一月二十八日）に長崎を出航し、ローマ訪問の途中スペインに立ち寄り一五八四年国王フェリーペ二



『原マルチノの演述』の扉  
『天正遣欧使節記』（雄松堂書店、昭和五十四年）より

学院で演述をラテン語で行なっている。この演述は宣教師たちの援助があったにせよ、ヨーロッパの言語に達した人が当時も存在したことは興味ぶかい事実である。演説集の表題の一行目は ORATIO HABITA A FARAD. MARTINO で、表題六行の日本語訳は「生誕以来一五八七年六月四日、ゴアなるパオロ学院に於いて、日本人ファラ・マルティヌス自ら及びその同僚の名において、彼らがヨーロッパより帰国して、イエズス会の巡察使アレサンドロ・ワリニャーニ（ヴァリニャーノ）師に行つた演説」である。

さらに、伊達政宗の家臣支倉常長は一六一三年十月二十八日（慶長十八年九月十五日）ガレオン船サン・ファン・パウティスタ号で月の浦を出帆し、ローマに赴いた。これは伊達政宗

世に謁見している。この航海は長い旅であったので、その間に少年たちは勉強して、ラテン語やポルトガル語やスペイン語も上手になったのだらうと思うが、今と違い命懸けの船旅で落ち着いてゆつくり語学の勉強をするような状態ではなかった。四人の少年使節のなかで、原マルチノが帰途一五八七年ゴアのイエズス会

## 著者略歴

浅香武和 (あさか・たけかず) take\_xapones@msn.com

東京都出身。現在、津田塾大学スペイン語講師、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学ガリシア語研究所員、日本学術振興会研究員（聖心女子大学）、スペイン文部科学スポーツ省 HISPANEX 研究員。ガリシア学士院会員。ラモン・カバニージャス文学功労賞受賞（2014）。著書に『現代ガリシア語文法』、『ガリシア語会話練習帳』、『ガリシア語基礎語彙集』の三部作（大学書林）。『スペイン語事始』（同学社）。『ガリシア心の歌・ラモン・カバニージャスを歌う＋CD』『吟遊詩人マルティン・コダックス＋CD』（論創社）。編著『スペインとポルトガルのことば』（同学社）。『ガリシアを知るための50章』（明石書店）。編訳にロサリーア・デ・カストロ『ガリシアのうた＋CD』（DTP 出版）、ロサリーア・デ・カストロ『わが故郷の昔話』。他

Grant -in- Aid for  
Scientific Research(c)  
JSPS KAKENHI  
Grant Number 16K02635

シンイスペインヤゴコトハジ  
新新西班牙語事始め

---

2018年 3月10日 初版第1刷印刷

2018年 3月20日 初版第1刷発行

著者 浅香武和  
発行者 森下紀夫  
発行所 論創社  
東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル  
tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232  
振替口座 00160-1-155266  
<http://www.ronso.co.jp/>  
装幀 奥定泰之  
印刷・製本 中央精版印刷

---

ISBN978-4-8460-1662-3 ©2018 Printed in Japan  
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。